かかわらず役に立つような予防プログラムを提供することになるはずであること。

4. おわりに

ハンター博士の講演は、HIV センターの同僚およびスタッフによって展開させられてきた認知行動モデル、およびそのモデルにもとづく啓発介入プログラムのありかた、そして研究者とコミュニティの協力関係といった諸点からなっていた。これらの内容が、日本において理論構築にもとづく啓発介入を実践していくうえでの何らかの参考や示唆を与えることを願って、この報告をおわりにしたい。

謝 辞:本シンポジウムはエイズ予防財団のエイズ対策研究推進事業にもとづくものである。

文 献

1) Hunter J, Schaecher R : AIDS prevention for lesbian, gay, and bisexual adolescents. Families in Society : The Journal of Contemporary Human Services, 75 : 346-354,1994

2) Hunter J, Wyche K, Miller S, Warne P : Evaluation of a researcher-community collaboration : The development of an HIV prevention curriculum for gay/lesbian/bisexual youth. Poster Presented at the 12th World AIDS Conference Geneva, Switzerland,1998.

3) Hunter J. Haymes R : It's beginning to rain : Gay /lesbian/bisexual adolescents and AIDS. (Schneider, Med), Pride and Prejudice : Working with Lesbian/Gay/Bisexual Youth, Central Toronto Youth Service,p137-p248,1998.

4) Rogers EM : Diffusion of Innovations : Fourth Edition, The Free Press, p1-p37, p96- p141, 1995.

5) Thompson JD : Organization in Action. McGraw-Hill, p25-p38, 1967.

出 典

本稿は、日本エイズ学会誌３巻２号（2001年）pp.110-114 に掲載されたものを転載したものである。

別表1
「Working It Out」に登場する 14 のストーリー

1. 独白：孤立
2. 異性とデートする圧力
3. 娘が母親にカムアウトする
4. 友人がバイセクシュアルであることを若いゲイが発見する
5. 2 人の若いレズビアンが暴力の脅威と学校での発覚に直面する
6. セイファーセックス
7. カムアウトした姉を拒絶する妹
8. 息子がゲイであることを発見した後に父親が家から息子を追い出す
9. ドラッグと薬物を使う圧力
10. 年上のゲイが年下のゲイを口説こうとする
11. 若い 2 人の女性が互いを発見する
12. セックスの可能性を探っている（異性の）親友
13. 2 人の若者が自殺を試みる
14. 若い女性がレズビアンであることに誇りを持つ

2. 外国の研究機関等への委託事業

研究課題名

「男性同性愛者／両性愛者／MSM の HIV／STD 予防啓発手法に関する研究」

（様式５）

〔外国の研究機関等への委託事業〕
（エイズ対策研究推進事業）

委託成果報告書

1. 委託申込者

所属・職名：特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会、副代表理事
氏　　名：特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会
（副代表理事　大石敏寛）

2. 委託実施者

所属・職名　（和文）：ザ・ライブラリー・ファウンデーション
エグゼクティブ・ディレクター
（英文）：The Library Foundation, Executive Director
氏　　名　（和文）：フェルディナンド・Ｖ・ブエンヴィアへ
（英文）：Ferdinand V. Buenviaje

3. 委 託 期 間：平成 12 年４月１日～平成 13 年３月 31 日

4. 委 託 課 題：男性同性愛者／両性愛者／MSM の HIV／STD 予防啓発手法に関する研究

5. 委託の成果

上記２の機関に男性同性愛者／両性愛者／MSM の HIV／STD 予防啓発手法に関する研究について委託した結果、以下の成果が得られた。

The Library Foundation（以下、TLFとする）は1991年よりフィリピンにおいてMSMのコミュニティに向けて活動を行ってきているNGOである。２年前、フィリピン国家エイズ委員会が若者およびMSMがよりHIV感染のリスクに対して脆弱であると認めたことを受け、TLFは15歳から24歳までの若いMSMに焦点を当てている。

TLFの介入プログラムの中心には、健康的な相互作用と価値観のためのワークショップ（Healthy Interaction & Values Workshop: HIV Workshop）と呼ばれている一連の啓発セッションの実践がある。そのワークショップは平均すると年に４回行われている。各ワークショップは、週末３日間にわたって行われ、HIV/エイズ、STD、エイズに関する法律、予防、セイファーセックス、コンドーム使用、セイファーセックスの交渉術などに関する正確な情報を提供し、判断を押し付けたりせずエンパワーするというような雰囲気のなかで同性愛問題とコミュニティ構築の議論が可能

となっている。

３日間のワークショップの主なプランを概略すると、第１日目には、参加者の多様な背景と環境を認識すると同時に、こうした様々な差異にもかかわらず共通の目標をもっているという認識を高めるような「多様性セッション」が行われる。そこでは参加者（の差異）を一様にならすことを目的としている。第２日目の「脆弱性セッション」での実践内容は、HIV/AIDS/STDとその予防、安全ではない行動における様々なリスク、そのリスクを完全になくすことのできないときの対処のしかたに関する情報提供などである。第３日目の「コミュニティ・セッション」では、MSMのコミュニティに影響を与えるような社会的諸問題について議論する場が設けられる。このセッションでは、前２日間で学んだことが参加者自身のグループやコミュニティで広がることを期待しつつ、この時点でピア教育技術についての教育が行われる。この過程で、参加者の再参加のプランが参加者自身によって作成される。

現在までに、TLFでは44回のHIVワークショップを開催してきた。ここでの報告はTLFから提出された報告書に沿った形で、2000年９月から12月の間に実施された最近４回のワークショップで得られたデータを提示し、分析する。

TLFはセッションという実践に先駆けて、質問表による調査を行っているが、大まかに言えば、これは参加者のHIV/エイズに関する知識(knowledge)、態度(attitude)、行為(practice)（KAP）について把握する目的を有している。さらに詳細にその目的について述べるとすれば、それらは以下のようになる。

①	ワークショップ参加者に関する属性データを収集する
②	HIV/AIDS/STDの基礎情報に関して、ワークショップ参加者の知識レベルを測定する
③	参加者が自分たちをどのような社会的環境に置かれているものとして見ているのかということだけでなく、特定の同性愛の問題に関して参加者の態度と意見を提示する
④	参加者の性行動と実践のリスクを査定する
⑤	セッションを行うにあたって、ファシリテーターを指導する。プレテストの結果によってどの領域に焦点を当て、強化すべきかが示される

このKAPの質問票は多くの参加者にとっての理解度を考慮して、英語ではなくフィリピノ語で作成されている。プレテストは４つの部分からなっている。知識の質問は、参加者がSTD、HIV/AIDSおよびセイファーセックスの手段にどれくらい慣れ親しんでいるかを測定するものである。第二の部分では、男性同士のセックス、同性愛、HIV検査など、ワークショップのあいだに議論されるいくつかの問題に対する参加者の態度を見るためのものである。第三の部分は、参加者の最近６ヶ月の性行動とその相手について調査するためのものである。最後の部分は参加者の属性データを得るためのものである。なお、この質問票調査は、ワークショップの参加者の属性や状況を把握するだけでなく、TLFが主催するワークショップの効果評価という観点まで含んでいるので、ワークショップの前後２回に分けて行われることになっている。

＜回答者の属性＞

当該のワークショップ全４回の参加者総計は84名で、その参加者全員が質問票に回答した。回答者のほとんど(48.1%)が16歳から20歳の年齢層で、その次に多いのが21歳から25歳の41.8%、26歳から30歳までが7.6%、31歳から35歳までが2.5%となっている。ひとりを除き、全員が独身者である。回答者の多数(65.5%)が自分自身を「ゲイ」だと認識しているが、25%は「バイセクシュアル」であると考えている。３人が「トランスセクシュアル／トランスヴェスタイト」であると回答している一方、１人が「わからない」と回答している。それらとは異なる自認をしているものも４人おり、自認のしかたは「クイア」、「性的解放主義者」、「女っぽいゲイ」、「ゲイになろうとしている」、というものである。49人(58.3%)が学生である。

データの提示と分析

Ⅰ．知識

知識項目に関しては、参加者がHIV／AIDSに関して比較的高いレベルの知識を有していることが示された。この傾向は、全４回のワークショップを通して一定している。そこでは、プレテストの平均スコアは、14項目中、７から11項目のあいだとなっている。ポストテストでは、この平均が９から13にまで増加した。こうした知識レベルの高さは多くの要因に起因している可能性があるが、そのひとつは、回答者のほとんどが学生であり、セクシュアリティの話題に関する自然な好奇心を有しているということから来ているようである。回答者のほとんどが大都市居住者で、マスメディア（の影響）にかなりさらされているということが、このようなことが知識の高さの要因になっている。

しかし、プレテストのオーラルセックスとアナルセックスのリスクを比較する質問では回答者の40%以下の人しか正解していなかったが、ポストテストでは、正解者は78.5%に至っている。STD治療における抗生物質の効果についての質問は、プレテストでは48.8%の人が正解していただけだったが、ポストテストでは正解者は84.8%まで増加した。いかなるSTDに対しても抗生物質が効くという思い込みがもっとも有害な誤解であることを考えると、このことは重要である。

正しく、かつどんなときにもコンドームを使うことに対する評価は回答者のなかでも高い割合を占めている。回答者の85%以上がアナルインターコースでも膣性交でもそのことがHIV感染を減少させると思っている。他方、アナルインターコースで挿入される側だけがHIV感染のリスクがあると思っている回答者は11%弱存在し、これももう一つの共通した誤解である。

Ⅱ．態度

態度に関しては、回答者は一般に自己に対して高い意識を有しており、ワークショップのあとにはさらにそれらをよい方向にもっていっているということが示されている。回答者のほとんどが、「同性愛は病気だ」とは考えていないし、「ゲイが子供に悪い影響を与える」とも思っていない。また、「ゲイは信頼できない」とも、また「ゲイは乱交好きである」とも考えていない。フィリピンではカトリック教が支配的であるにもかかわらず、ほとんどの回答者が、「他の男とセックスをすることを罪」とは考えていない。したがって、「エイズが神による罰である」とも、

「乱交がエイズに結びつく」ともほとんどの人が考えていないのだ。

「エイズは自分たちにとって重要な問題だ」と80%以上の回答者が考えており、「セイファーセックスを行うことは重要である」と94%強の人が思っている。しかし、50%の人が、「みな検査を受けなければならない」とも回答している。プロジェクトのスタッフは、HIV抗体検査は自発的に受けるものであることを繰り返し述べ、こうした命令を配慮しないことのさまざまな意味を議論することで、こうした問題に対処した。その結果、ワークショップのあとには、この数字は29.1%にまで減少した。

約24%の人が、「コンドームを使うことでセックスにおける快楽を減少させる」と回答している。「コンドームの使用が性的快楽を減少させるかどうかわからない」と答えた人は34%強であり、このことは回答者のなかではコンドーム使用率は低いことを示唆している。けれども、ワークショップ後には、「コンドーム使用が性的快楽を減少させる」、そして「減少させるかどうかわからない」と答えた人の割合は、それぞれ、7.6%と8.9%になった。

Ⅲ.(性)行為

TLFでは、「セックス」を、身体的行為と定義し、その中には、特定の状況で身体的に行っている、２人あるいはそれ以上の人数による相互マスターベーションも含まれている。そして、セックスをする相手を、「セクシュアル・パートナー（セックスの相手）」と呼んでいる。またこの性行動の評定では、過去６ヶ月間のセックスおよびその相手についての質問を行っている。

回答者の70%強が、11歳から20歳までのあいだにセックスの初体験をもっていた。フィリピン大学の人口研究所によって行われた1995年のヤングアダルト生殖力調査によれば、最初のセックスの相手が男性か女性かは示されていないものの、フィリピンの少年のほとんどが14歳から16歳までに「童貞」を失うと言われていることとだいたい符合する。

回答者のセックスの相手の多くがカジュアルな知り合いか見知らぬ人であることがわかる。カジュアルなセックスの相手をもつことは、セイファーセックスの実践においては多くの意味合いをもっている。ワークショップのなかで異なるセッションで回答者から得られたエピソード的データによれば、行きずりのセックスをすることによってセイファーセックスができないと彼らは話している。その理由は次のようである。

・思いがけなくすることになったセックスに対しては準備していないことが多い。
・彼らがするのはオーラルセックスが多く、ほとんどの人がオーラルセックスの場合にはコンドームを使わなくてもいいと考えている。
・かなりの数の人たちが、STDに感染するかもしれないとは実際には考えていない。
・セックスの相手自身も予防の手段を取りたがらない。
・衝動が健康に対する関心よりも先行してしまう。

セックスの相手をみつける場所のうち、もっともポピュラーな５つは①パーティ、②学校と映画館、③インターネットのチャット、④モール、⑤路上、となっている。映画館でのクルージングは、回答者の間ではもう一つの卓越した実践である。ゲイのクルージング・エリアとして知られているマニラ大都市圏の周りにはさまざまな映画館がある。モールの中にある一流の映画館か

ら、古い映画を上映したり、ソフトポルノを上映しているような三流映画館までさまざまである。MSMに向けた活動をしている他のNGOはこうした映画館でピアによる啓発活動を始めている。しかしながら、そうしたプログラムは、これらの施設で定期的に行われる警察の手入れによって中断させられることも多いのである。

またコンドームを着けない挿入を伴う性交の実践が、回答者の間でかなり顕著であることが示されている。オーラルセックスをしている66人の回答者中、56人がコンドームを使っておらず、それを受けた42人は、相手の半数強が口の中で射精したと言っている。また、30人がアナルセックスでは挿入される側であり、それに対して20人が挿入する側であった。しかし、彼らに共通しているのは、アナルセックスでもコンドームを着けていないということである。（挿入される側の30人のうち17人、挿入する側の20人のうち11人）

コンドームの使用頻度については、「一度もコンドームを使ったことがない」と答えた回答者は64.8%で、それに対し、「いつもコンドームを使っている」と答えているのは9.2%となっている。「コンドームを使っている」と答えた人でも、その使い方が正しいとは限らない。ゴムのコンドームには適していない潤滑剤であるオイルベースのローションを使っている割合は、もっとも高かったのである。

TLFの質問票では、性行為そのもの以外のさらに二つのリスク要因、すなわちセックスをする前のアルコールとドラッグについて質問している。回答者のなかでは、ドラッグの使用率は少ないが、ここ最近の６ヶ月には、飲んで１回から５回セックスをした回答者は、かなりの割合に上っていることは注目すべきである。HIVおよびSTD感染という視点では、アルコールの影響は簡単に無視されてしまう。というのも、アルコールが直接的にSTDを感染させるものではなく、セックス相手の選択の判断、あるいは性行為、あるいはコンドームを使うか否かに対する判断に与える影響については、ワークショップのなかでもファシリテーターが参加者に伝えているということである。

回答者の83%弱は、「HIV抗体検査をこれまで一度も受けたことはない」と回答している。しかし、ワークショップのあいだに、かなりの人数の回答者が、検査に行こうという明確な意図ではないにせよ、いつか機会があれば検査を受けてみようという関心も示した。

検査に行かなかった理由として次のようなものが挙げられている。

・どこに行けばいいのかわからなかった。
・検査の結果を親に知られるのが怖い。
・検査料を払うだけの経済的余裕がない。
・参加者の行為がHIV感染につながるとは思っていない。

以上の質問票調査の結果とワークショップ実践のなかで得られた情報からTLFは次のような結論および提言を提示している。

ワークショップの前後に集められたデータにもとづく結論としては、

1．ピアがファシリテートするHIVワークショップは、正確な情報を提供し、誤解を修正し、HIV/AIDSとSTDに関する知識を強化するための効果的な手段である。
2．態度は一夜にしては変えられないが、MSMに影響を与える重要な社会的問題を議論するための、プライバシーを守り、価値を押し付けず、エンパワーするような環境を提供することにより促進されうる。
3．HIV/AIDSおよびSTDに関する比較的高いレベルの知識は自動的に実践や行動に結びつくわけではない。というのも、セックスそれ自体の実践は、個人的、家族的、社会的、宗教的、文化的要因によって影響を受けているからである。

さらに上の結論およびワークショップ実践から導き出された提言は、

1．回答者がSTD（例えば淋病やクラミディアというように）にかかったことがあるかどうかを質問するのではなく、代替案としてSTDの症状（性器から膿が出る、性器に潰瘍がある、など）についての質問をしたほうがよい。なぜならば、これらの言葉は、あまり臨床的ではないので、回答者にもより理解しやすくなる。
2．ワークショップの後に事後確認活動をより頻繁に、かつ集中的に行うこと。その理由は、こうした事後確認によって、参加者のなかで行動変容を維持するだけではなく、ワークショップのなかで学んだ新しい情報や態度を裏付け、再強化することになるからである。
3．HIVワークショップはさらに学校やコミュニティを中心に生活している若年層のMSMに対して行われなければならない。しかし、これは外部的な資金に依存しており、したがってスポンサーと資金源をどれくらい活用できるかによるものである。

委託申込者としての考察

外国の研究機関（The Library Foundation、以下TLFとする）に委託したことによって得られた成果によれば、TLFはフィリピンにおける男性同性愛者およびMSMのコミュニティに向けたエイズ予防啓発および介入実践を行うNGO（CBO）として、比較的長い歴史や経験をもつと同時に、そこで行われている介入実践がフィリピン社会で生きるゲイ男性やMSMにとって、改善の余地は残されているものの、ある程度の啓発効果をもっていることがわかった。申請者も日本のエイズ・同性愛の啓発活動をするNGOとして、ゲイ・コミュニティにおいて調査と介入を同時に行い、介入に結びついた調査研究方法論やモデルの開発に取り組んでいるということでは、フィリピンのTLFの調査実践や介入の取り組みと共通する点を有していると言える。TLFで行われているワークショップ参加による啓発介入は、申請者が日本で行っているリスクアセスメントの手法にもとづく調査および実践介入と比較すると、かなり方法論的にも共通点をもっている。さらにTLFの今回の報告結果を見れば、対象の属性や知識・態度・行為においても同じような傾向を示している部分が多いと考えられる。このような共通した基盤が与えられている上で、いくつかの点で異な

る傾向を示すものがあるとすれば、その相違点が生じる理由や原因を二国間のNGOの間で議論し、文脈的あるいは文化・社会的相違などにも目を向ける必要性があるということが理解されるだろう。その中で、こうした形の海外委託研究は、現在進行中の申請者の研究にとって、示唆的な視点を提供してくれるものとして位置付けることができる。

さらに、申請者は、現在、介入実践の方法についての研究を行っている。そこでの困難な点は、これまで日本の国内では、ここ数年来、性行動調査のようなものは行われてきていても、エイズ予防の介入実践の方法論に関しては、まだ緒についたばかりである。したがって、参照できるような方法論はかなり乏しいというのが現状である。そのような中で、TLFの実践のこれまでの経験や構築された介入方法は、ひとつの方法として、介入方法のモデル構築を目指すわれわれの研究を進めていく上でかなりの程度参考になる。

2000（平成12）年度の研究委託では、ベースライン調査が主要な内容であったために、二国間NGOが実施している各々の研究の中に、共通した項目を設定することが難しかったが、2001（平成13）年度以降に向けて、質問票や介入実践の面で、共通の項目をきちんと設定し、また介入方法の点でも、共通性をもたせた部分を含みこむなどの工夫をすることを通して、二国間の比較研究としての調査を実施するような方向性を模索していきたい。

CBO：Community Based Organization

平成12年度厚生科学研究費補助金エイズ対策研究事業
エイズに関する普及啓発における非政府組織（NGO）の活用に関する研究

同性愛者等への普及啓発に関する研究班・報告書

2001（平成13）年3月31日　発行

特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会

164-0012　東京都中野区本町6-12-11　石川ビル2F
TEL 03-3383-5556　FAX 03-3229-7880
e-mail：occur@kt.ri.or.jp　URL:www.occur.or.jp

厳禁無断複製転載 © 特定非営利活動法人　動くゲイとレズビアンの会